

此を俯して射む然らば我ハ便利ありて彼ハ不利なれ
 ハ進む事得ざらんれば或人の曰敵の鐵丸の上る事を
 得ざるべきかと問うば其人答ふる詞無くして退く聞者詰
 り傳てくれば笑つるも此兵と用ふるの常法ハ機ハ臨
 み變て制し進退合散し奇と出ひ事窮て無らば事ハ將
 の任小在のみ漢の龜錯ケ陳の三策昔龜錯兵事と上
言して曰兵を用
の戦ひは臨みみと合する時の急務三ヶ条有一つ小曰地
形と得二は曰士卒と服習は三は曰器用利は三の者
兵の大要なりて勝負を決する所なり尤も切要な係なり一
將たる者知らば有べし
 とも関く時ハ不可なり其後たる者何の補ひありむ
 大倭國家ハ將と無更の日ハ扱し將と更あるの際に任ひ

くれと扱む事ハ精きを貴びくれと任ぐる更ハ専らたる
 と貴ふはあり

爰ハ井邑の懸監六李舜臣を擢て全羅道の左水軍節度使
船手の大将
位階三品と此舜臣ハ膽略有りて騎射を善ハ嘗て造
山の萬戸一鎮の
將六品と為る時は北邊胡の寇多かりし舜臣
 計を以て胡人の干乙其と云者と誘ひ出さるち傳てて兵
 營に送るて斬りめくれを胡虜の患ひ遂に息と云て巡察
 使鄭玄信と云舜臣ハ鹿屯島の屯田と守護せしむ或日大
 小霧深しる軍人盡く田は出て禾と刈り扱めくれを
 柵中には但十餘人在り其時俄に胡虜の騎兵四方よ

了守あま集あま了あまけるあまうあま舜臣あま柵門あまと閉あまて自あまらあま柳葉箭あまの如あまく乃あま
 文字あまの如あまを以あまて柵門あまより賊あま數十人あまを馬あまより射あま墜あましり
 は胡虜あまの兵あま驚あまれ逃あま去あまる舜臣あま柵門あまを閉あまき單騎あまより大あま
 呼あまびてこれと逐あまふ虜あまの衆あま大あまに奔あまりて遂あまに掠あまめ
 死あまれたるもれと取あまり還あましぬ然あまれども吹あま舉あまる人も無あま
 及あま第あまの後あま十餘あま箇あま年あま何あまの沙汰あまも無あまり始あまて井邑あまの縣あま
 監あまとなれり是あま時あま日本あま勢あま攻あま来あまるべしこれ沙汰あま日あまに急あまなり
 けしバ國あま王あまより備邊あま使あま都あま領あま議あま政あま左あま議あま政あま右あま議あま政あまと始あまめ領事
 無あま局あま宰相あまと云あまハ無あま職あまはて備邊あま司あまは會あま集あまする所あまなり命あま
 ぞう各あま才あま器あまのある將帥あまは堪あまたる人と薦あまめしめたるは柳

成龍あまより李舜臣あまと奉あまく遂あまに井邑あまより水使あま節度使あまに擢あま
 られたる時あま都あまに在あま合あまする武將あまの内あま唯あま申あま磁あま李あま鑑あまハ取あまり
 大將あまの聞あまえあり慶尚あまの右あま兵あま使あま曹大坤あまハ年あま老あまて勇氣あまなし
 衆人あま大將あまの任あまふ堪あまる事あまを憂あまふ柳成龍あまよりあつて
 李あま鑑あまを以あまて曹大坤あまに代あまりし事あまを請あまふ兵曹判書あま洪汝諤あま
 云あまく名將あまハ當あまに京都あまに在あまる李あま鑑あまハ遣あまさるまゝと柳成
 龍あま再び申あまて曰あま凡あま事あま預あましめると貴あまぶ況あまや兵あまを治あまめ敵
 と禦あまるや尤あま事あま俸あまの小あま辨あまどくうあまバ變あま有時あま武威あまある李
 鑑あまを遣あまさるべし何あまれのとさきああまり使あまふべき寧あまつりよな
 所あまハ一日あま少あまくも早あまく生あまき預あまめ備あまて變あまを待あましめバ遮あまるハ

或ハ益有む然らばして事倉卒の際にかりて客將を以て
 馳せ下し既ニ本道の形勢と諳んせし又軍士の勇怯と識
 らざるは引れ兵家の忌む所必ば後悔い有むと云ふも
 取あふもなり柳成龍又備邊司より出て諸人と議論して申
 て祖宗の鎮管の法と修めむと請ふ大略以為國初各道ハ
 の軍兵皆な其鎮管より分ち屬して事有る時ハ鎮管屬邑を統
 べ率め隊伍の人数と刃鋒整一置て主將の号令を待つ法
 なる慶尙道にて是と言ふる金海木丘尙州慶州安東晋州
 是と六鎮管といふと敵兵有て一鎮の軍或ハ利を失ふと
 云ふも他の鎮より次第に兵を嚴めて堅く守り靡然と

去て奔り潰る小至らざるむべし往昔乙卯年の夏有
 て後ち金秀文全羅道に在りて始て軍法を改め分ち道内
 の諸邑を割りわたり巡察使防禦使助防將都元帥及び本
 道全羅の兵水使兵馬節度使に屬せしめ是と名づけて制勝
 方略と云諸道皆これに效ふ是に於て鎮管の名ハある
 と雖も其實用となさむべし一たび急變有時ハ必將を遠近俱
 小動き大將あき軍兵より原野の中を聚めて將帥と千
 里の外小待し大將其時に至らざるに敵の鋒さき逼ま
 る時ハ軍中の人心驚き懼る是必ば敗潰るの道なり大
 衆既に潰るれを復し合はさき事難し此時に當りて將帥

至る来ると雖も誰と與らざる戦事を爲ん
 移文と廻し便宜の処に聚る京將の至るを待居たりけり
 八開慶以下の守令皆大丘に赴き川辺に野陣を張り巡
 使の至ると待居けり小數日を経ても至らば敵軍漸
 く近つぎけせハ衆軍騒動して皆逃げ散るる後子巡察
 使李鎰髪と乱し赤裸なきて走る如く更子祖宗の鎮管
 け此処の文面形勢波に彷彿せり如く更子祖宗の鎮管
 の制を修め常は訓練は熟し事有る時あら用ひ前軍の者
 ハ後軍は相應し内軍ハ外軍と力と合せ禦がは土の崩る
 るが如く危の鮮る如きの敗せ至らば是事は於て便利な
 るとく其事と本道尚ほ下りけた然れども慶尚道の
 監司金晬以為らく制勝方略行ひ用ひる事已久し今猝
 小改め變ふつうべとてこの議論遂に寢るる

壬辰日本文の春申磁李鎰とち遣く邊備を巡視せ
 小李鎰ハ忠清全羅道に往き申磁ハ京畿黃海道に往き管
 一月と過て還る點檢たる所の者ハ弓矢槍刀の少く郡
 邑何れも平常の法度を守りのみを備へ禦の長策いな
 一申磁ハ素より殘暴の名ある大將とて至る處人と殺し
 威勢を立々れハ所の守令一邑の代官もこれと畏れ民夫と出
 一道筋の修補として馳走極めて修りたる度と大臣の
 通行とても如きと々何れも京に歸り巡檢と遂たる由
 と申出てきて申磁柳成龍が宅へ来る成龍云く晩も寢
 あらば公孫は將帥に任せらるる今敵軍の寄来らん時

ハ難易如何と問ふに申磁甚るるれを輕んト以為憂るる
 不足らびと云成龍云然らび日教人往昔ハ但短兵大刀を
 特む今ハ兼る小鳥銃銃の長技有る故て輕く之を視るべ
 らびと申磁更もたげ鳥銃有るても豈能く盡く中ら
 む成龍又云朝鮮昇平久しく士卒怯弱なりと果して急
 變有らハ支一難きを必定あり吾甚るれを憂ふと云ひけ
 れども申磁敢て者み悟らびて歸る蓋し申磁癸未年
 日本天正穩城朝鮮咸鏡道もつ府使都護府使と為る
 十一年北虜威鏡道近圍威鏡道のと申磁馳せ
 往てこれと救ふ十餘騎と以て突崩し胡兵圍とを解て去

了の柵柵儀儀申磁の才才大將大將の任任堪たうとて陞陞て北兵
 使咸鏡は兵馬節度使為了了才才久久とて陞陞て資憲
 正南北あり位階三品議武選軍務之一曹の統領也日本
 正二は陞了以て兵曹議と司る慶半書の兵部卿類以
 小も為らむと欲るるも至るるれと意氣銳く正趙括の
 秦と輕むむるの如く畧事臨て悞悞の意たうとハ識
 者ハこれと憂ひたり

對馬守義智重到朝鮮之事

日本 玄菟柳川調信ハ朝鮮の三使と送る届て對州小隊
 太閤の嚴命と朝鮮國王領掌領掌たれ趣と具具達達以義智これ
 を聞て朝鮮の君臣あざ太閤の猛烈と悟らび等閑心得

たると覺て了る余自身は渡りて教一諭もぐいと云ふ
 家臣等ハ猶諫めて今一應使と馳せて諭したまはつと云ふ
 一と云ふと云ひくれば義智云長若豊前二人のもれ面
 談くても領掌なきふ誰人歟能く云ひ諭さむ然れども朝鮮
 理強く領掌せざるに於ては立處に大切よ及なく今勇猛
 の日本勢攻渡るに至りて八日あるに於て漢城ハ元と
 平壤鴨綠江まで攻入らむ左あは朝鮮亡國とならむ
 面也累年の隣交に對しても恐ひ難き事なり又日本は
 於ても為で叶ふがれ軍と云ふもあらば其上平壤鴨綠江
 攻入らむは容易なるべし其末太尉の志念去りて

大眼との取合はならん時其國ハ幾年掛らむも知ア
 一然る時ハ日本の死傷も幾若干とも測り難うむ和
 平とならハ兩國の為ならず吾等も渡海の勞よく厭ふ可
 らばとて同年六月再び海を越え朝鮮に到り金山浦の守
 將に諭して曰く日本の開白大小兵船を幾つて大眼を攻
 むに欲は左あむ時ハ先づ朝鮮の地方并せ擾さるべき
 事とて著しやく朝鮮も大眼を報げ和を請ひ好
 みを通せしめば此患いと免るべし左なく一旦こと起
 る日小至りてハ隣を啗むも益有らむ一吾れ累年の隣
 交の好いと以て再びわが海を越て此事情を告るな

了と眞實にふりさく一船に乗て居て十餘日見合せし
ども朝鮮王遂に其言を信せず義智も此上を力及らばと
て國を歸り速に上京して太監に詳く朝鮮の事情を演
ずるにわきまは秀吉これと聞き殊に朝鮮よりの返楡の内
に日本の方を以て大服を攻めしと思つるハ不異以蠶測
巨海如蜂螫龜背と書きたるを大に憤り怒り兵を發せし
の議を決せしむる乃ち義智先導たるも肯と命に銀米及
び兵器火藥を賜ふ九鬼大隅守嘉隆に命に伊勢の浦にて
大船數艘を造らせらるる中より日本丸と名付し八日本
を乗せ有よりき大船なり其餘中國四國九州の諸侯に命

ト名戦艦と造り軍糧を蓄く頻りに兵を催らるる
了諸將も異國よりの合戦なりを甲冑旗纒馬印を始め一
切の兵具馬鎧に至り軍粧一際花やうを用意せしむる
對馬守義智八家臣等も示して何國中の軍中は自在なる
づもやうなるれども別して異國の軍行大将を始め諸軍
勢左社意外の事多うむ末に近も聊疎略なきやうに懇
に差固らるる先第一は案内者なりとて國中より韓土熟
知の者四十餘人を撰り出で本當あり扱專要ハ船の乗
附け也如何し海路功者を撰り大勢を當りて置ざると
なり日本勢壬辰より戊戌迄七箇年の間朝鮮一渡海の船

幾若干艘の對州を徑るは無く且對州北邊朝鮮一の渡
りよし海中瀬多く中よハ三里餘の長瀬も有てより過ち
有るも小船毎に乗付け連海路の案内有るも故も前
後の渡海は一艘も過ちハ無るも

朝鮮是より先辛卯春日本平調信僧玄蘇等通信使と偕

よ來り東平畿宿に備邊司より申るは黄允吉金誠一
等より私酒餒と携一往て旅情と慰め後客として彼
方の夏も向情舟とさぐり聞きたつハ兼て變に應じ
の策よなきとして金誠一と客畿に至りむ玄蘇果
て密に語らるると中國久く日本と通路と絶ゆ之秀

吉此を以てハ憤りと懐き兵を起さしむるなり朝鮮
先づ明朝の傳一貢路として通ざる事を得せりハ心事
なくして日本ハ十餘州の民も兵革の勞を免れむと
云ふ誠一等大義を以てこれと論し諭せり玄蘇も
此ハ昔高麗元兵と導て日本を撃つ日本此を以て怨
と朝鮮に報じらハ勢の怒るも所たつとして其言漸く悖た
りよ是より金誠一等も復回いたるハ日本調信玄蘇ハ自
ら歸國せり辛卯の夏平義智又金山浦に到り邊將に云
々るは日本大明は通せしと欲し朝鮮を傳へたは幸
甚かしく然らばハ兩國將の和好と失せし此乃ち大夏

かつ故の殊さるる来て告ぐるやうと邊將以て都一聞達
 けしべ朝廷の評議は通信使をわづらしたる夏と答ゆ且一
 返翰等の悖を慢とてたるを怒り何の答つても無き一ゆ之
 義智船は泊る夏十餘日快くして憂ひ去る義智より自
 辺將の大事と告げ今此夏許容無くも後の悔とも更
 益有る夏と朝鮮後子保く感一日不共戴天之讐なりと
 云たる夏と朝鮮後子保く感一日不共戴天之讐なりと
 告たる義智再應海して此大夏と是後日本入復来る者なし
 釜山浦の留館人数此所居込事と弁は是と留館と云
 日本人常數十人在一のたんくく引き歸り一館幾と
 空ぬ朝鮮人これと恠りこく事

日本諸將渡海小西行長攻釜山城之事

日本天正二十年壬辰正月五日太閤秀吉加藤主計頭清正
 小西攝津守行長と召し朝鮮征伐の為西人の亂を取ら
 ざる替る替る隔日先陣相勤むべき旨を命ぜり此
 のとに行長は朝鮮國よりの制札日本に双びたき大黒
 と云名馬と賜ひ并小軍書一卷と授けり清正は朝鮮
 少くの制札并軍書一卷と南無妙法蓮華經の大文字の
 旗と賜ひ前うら仰せ給ふやう吾播磨の國と拝領せし時
 織田信長よりゆづり受けける旗たうと云く清正大に悦
 び小西は向ひ我此旗と外國に飄一猛威と異邦に振るひ

と詔ひ御邊の旗は如何に致さうと向ふ小西を元來心
 利發男たれを某ハ紙の袋に朱の丸を付け旗とらる
 と答へけせば清正完尔と打笑ひて已ら第を歸りたる
 柳加藤清正ハ御堂關白道長公の末葉たる秀吉の母公し
 清正の母と後弟より初め希之助と云十五歳より元服
 あり秀吉を奉云一十七石の領知を賜り其後數度粉
 骨と盡し戦功勝げて算ぶるべし秀吉其勳功と感し肥
 後の國小於て二十萬石を賜ひ隈本の城に居住あり行長
 は泉州堺の町人小西如清と云ふ藥種高賣せし者の子
 たる一づ秀吉の寵を得て其身武勇長せしは清正と

等く朝鮮の先陣たるゆゑかちて斯のごとく詞をけ
 一うども行長頼く其心とさして對しは清正も打笑
 て止ふり多は丹波國の住人内藤一洗飛彈守如安其此
 文字の聞え有るれを小西よ添て渡海せし行長遠く
 我姓名を知しむさめ内藤と改めて小西飛彈守と稱して
 渡海せしめけりかくて朝鮮追伐の人数備一定めあり先
 つ先陣の備と二年よりらる加藤主計頭清正鍋島加賀守
 直茂相良宮内少輔頼貞一列より小西攝津守行長宗對馬
 守義智松浦式部卿法印鎮信有馬修理大夫義純大村新八
 郎純忠五島大和守純玄一列より三番より八黒田甲斐守長